

戦後中国東北地区における日本人留用技術者の諸相

——資料「中共事情」より探る——

飯塚 靖

はじめに

戦後、多くの日本人が中国東北地区において中国共産党により「留用」（日本人を帰国させずに使役したことに対する中国側の呼称、以下ではかっこ省略）された。本稿は、東洋文庫及び外務省外交史料館に所蔵されている「中共事情」という新資料を用いて、こうした日本人留用の実態解明を目的とするものである。

この共産党による日本人の留用に関する研究としては、鹿錫俊「東北解放軍医療隊で活躍した日本人―ある軍医医院の軌跡から―」（島根県立大学北東アジア地域研究センター

『北東アジア研究』第六号、二〇〇四年一月）、朱建榮『中国で尊敬される日本人たち』（中経出版、二〇一〇年）、堀井弘一郎『満州』から集団連行された鉄道技術者たち―天水「留用」千日の記録―』（創土社、二〇一五年）などがある。特に、堀井の研究は、日本人民族幹事と留用技術者との間の軋轢、強制的な天水への移動など、留用のマイナスイ面も検証されており、興味深い内容である。

他方、中国側では日本人留用者を顕彰した本を出版しており、その邦訳が、中国中日関係史学会編・武吉次朗訳『新中国に貢献した日本人たち』（日本僑報社、二〇〇三年）、同『統新中国に貢献した日本人たち』（日本僑報社、二〇〇

五年)である。ここでは、留用日本人が献身的に貢献し、中国政府もそれを高く評価し、戦後の日中友好の礎となたとされている。こうして、NHK「留用された日本人」取材班「留用」された日本人 私たちは中国建国を支えた(日本放送出版協会、二〇〇三年)のように、日本のマスコミも基本的に中国側と同様の枠組みでの報道となる。

しかし、上記のような内容は歴史の一面であり、留用の実態は大部分が本人の意思を無視した強制によるものであり、多くの留用者が戦闘や病気などで日本に帰国できないまま非業の死を遂げている。そればかりか、共産党により正式の司法手続きも経ずに処刑・投獄された人々もいた。この戦後中国での留用の実態を解明する上で、「中共事情」は注目すべき資料である。本資料は、内閣総理大臣官房調査室の関連機関が実施した後期集団引揚者¹⁾への聞き取り調査であり、調査は一九五三年以降実施され、中国共産党に兵士、医師・看護婦、運転手、大学教授、研究所研究員、各種工業の技術者・労働者などとして留用された人々からの調査が大部分を占めている²⁾。それは引揚直後の生々しい証言であり、各自の留用までの経緯、留用時の業務内容や処遇、中国の科学技術・工業・教育などの諸政策の実

態が語られている。留用者の多くは、引揚後自身の回想録を残しておらず、本資料は得難い資料となっている。だが、本資料は、個人の狭い見聞の内容を短時間の聞き取り調査でまとめたものであり、事実関係に誤りも多く、他の文献との照合が不可欠である。本稿は、この「中共事情」を、留用者による各種回想録や国会会議録(引揚問題の調査委員会関係)などの資料と併用して利用することにより、留用の実態解明を目指すものである。

本稿では、大連在住技術者の留用問題を検討対象とする。大連は高等教育機関や研究所・工場が集中し、多くの日本人研究者・技術者(以下では両者をまとめて技術者と記述する)がいた。また日本の敗戦により、「満洲」(中国東北地区、以下かつこ省略)で活動していた多数の技術者が避難して来ていた。そして、大連市はソ連軍の軍政下におかれ、中国共産党が行政権を掌握していた。そのために、共産党による技術者留用工作が活発に展開され、多くの技術者が大連に残留し、さらには山東半島や「北満」(中国東北地区の北部、以下かつこ省略)などの共産党支配地区に送り込まれた。本稿では特に、北満に送り込まれた技術者に焦点をあてて、その留用の真相に迫りたい。

一 ある留用技術者の訴え

資料「中共事情」の中には、「中日両国の共存共栄の為に謹而厳肅なる総理閣下の御高教を懇請するの書」と題する、周恩来國務院総理に宛てた請願書がある。⁽³⁾それは全体で一二二頁という長文であり、中国引揚者からの聞き取り調査を主とする本資料群の中で、特異な内容となっている。調査者執筆の「まえがき」では、本報告はX三八氏に対する出張調査結果であり、同氏は在中国三〇年に及ぶ工学者、満洲における「水源工学」の権威であるとされる。また、その内容は、「同氏が新中国滞留十カ年間の生活体験を通じて、身をもって感じた『矛盾』を直接周恩来総理に質したものと⁽⁴⁾している。このように実名は秘匿されているが、本文書三六頁には、その執筆者が「清水本之助」であると記載されている。清水本之助とは、満洲井戸（井戸筒側面から多数の多孔管を含む水層に放射状に打ち込んだ井戸）の考案者として著名な水道技術者であり、その井戸は関東州を中心に浅井戸や集水井に適用して多数建設された。その経歴は、一九一五年京大土木卒、二六年関東州技師、一九三七年関東州庁土木部長、戦後も現地に留用されて、中ソ合

弁旅大市自來水（水道―筆者）公司最高技術者などを務め、一九五二年に帰国したとされる。⁽⁵⁾

本文書は、「新中国の真相を知れ」、及び「中日両国の共存共栄の為に謹而厳肅なる総理閣下の御高教を懇請するの書」（日付、住所、肩書、請願者名が、一九五四年一月二八日、西北行政委員会人事局招待所内、元旅大市人民政府城市建设委員会技術顧問、工学博士某と記載されている）の二つの部分から構成されている。すなわち、後者は清水が引揚げ直前に周恩来総理に送付したものであり、後者は引揚げ後に執筆あるいは口述したものであろう。

本文書の「新中国の真相を知れ」の部分では、一九五四年一月〇月の国慶節に際しての、日本からの「国会議員及び学術文化視察団」に対する周恩来総理の談話（清水は本内容を雑誌『世界』一九五四年二月月号で確認したとする）に対して、激しい異議申し立てがなされている。すなわち、周恩来は視察団に対して、国共内戦で多くの日本人が中国人民解放軍に加わり、兵士、医師、看護婦として働いてくれたことに感謝している。そして、「この事を日本人は進んでやったのであって、我々は決して強制しませんでした。昨年すでに多数の日本人を日本に送りかえました。日本

にかえった人の数は二万六千人以上ありますから、もしも私の話を信じないなら、その帰国者たちから聞いてみて下さい」と語った。⁽⁶⁾この周総理の談話に対して、清水は次のように厳しく批判している。

これ（周恩来談話―引用者）は白々しい「ウソ」も「ウソ」、計画的（？）「大ウソ」であり、それは、全世界五十九カ国から千数百名にのぼる祝賀使節や、各種団体や、ジャーナリストが、首都北京に集まったこの絶好のチャンスをとらへ、これらの面前において戦後中国に残留した日本人は、悉く自ら進んで残留した者であつて、決して中国側から残留せしめたものではない。これを「ウソ」だと思ふ者があるならば、帰国した二万六千人の日本人に聞いて見よという白々しい詭弁を弄し、これをもつて

一、脅迫、欺瞞、甘言、トリック等、あらゆる□手段をもつて日本人を強制抑留した事実。（□は判読不能）
二、日本政府に対する政治的かけ引きの具に供するために、虚偽の口実をもうけ、人権を蹂躪し、自由を剝奪し、無期限、無条件の下に残留者を僻陬の地に強制分散せしめた事実。

三、昭和二十四年八月十日、東京日比谷公会堂に集つた全国留守家族代表が、毛首席宛ての公開状によつて曝露した法と正義と人類愛の無視蹂躪の事実
等の非人道的なる鉄証的事実を全世界の前において根本的に否定抹殺し去つてしまつたのである。⁽⁷⁾

そして、「懇請するの書」においては、中国当局が日僑（日本人残留者・留用者）にとつた不当・理不尽な対応が列挙されている。例えば、清水の水道技術者としての意見に大連市当局が、耳を貸そうとしなかつたことである。清水は、市当局の大規模工業化計画に対して、工業用水の計画なくして大規模な工業化計画は立てられないと提言した。だが、これは市当局には全く受け入れられなかつたとして⁽⁸⁾いる。次に、清水が強く抗議しているのは、一九五三年に大連在住の日本人を全て帰国させるとしていたものが、同年一月に突然中止となり、大連在住者全てを僻地送りとしたことである。その中止の理由は、旅大地区の軍事機密の保持、ならびに帰国者が吉田反動内閣より嚴重なる迫害・圧迫等を受けるのを避けるためと説明された。また、その移送においては「冷酷なる待遇」を受け、地位・待遇・給与などは決して現状以下に低下させないとの約束も守られ

なかったとしている。⁽⁹⁾

清水本之助が中国共産党の日本人留用政策を厳しく批判する背景には、自身に対するあまりにも冷酷な処遇にも大きな理由があった。清水が一九五〇年九月一日付で大連より日本に引揚げた坂本善三郎（元大連工業会主事）に送った手紙では、長男が戦死、長女も病死しており、もし自分が帰国できた場合には高齢をおしても働かなければならないと述べていた。また、大連で残留している三男は農業学校を出て農事試験場に勤務しているので、帰国した場合に は帰農を考慮しており、日本では引揚者に対して荒地開墾などで便宜を与えているかを問い合わせている。⁽¹⁰⁾ 清水は高齢でもあり、心臓病、高血圧症などに苦しんでいたため、帰国を強く希望したが、一九五三年一月には家族と一緒に遠く陝西省に移動させられてしまった。本資料には、西安への移送過程と西安における冷酷な処遇が詳しく述べられている。すなわち、移動列車には暖房も効かない故障車が割り当てられ、西安駅到着後の宿は窓も暖房もない粗末な旅館であった。こうして清水は、心臓病の発作が頻発するようになったが、西北行政委員会当局は、医師も派遣しな⁽¹¹⁾かった。清水は西安到着後一二日目にやっと西北行政委員

会人事局幹部招待所に収容されたが、「しかるに、健康状態のこの様な本人を収容した宿舎は、本招待所中最も不潔、最も不衛生、最も不健康、且つ最も不安静なものでありました。その理由は、本宿舎は、同招待所の入り口に位するのみならず、本人の枕元よりわづか幅五米の用便用の通路を距て、数百人の共同便所があつて、白昼と云わず、深夜と云わず、交通者及び用便者のために常に喧噪を極むる外（中略）七ヵ月間殆んど一夜として完全に安眠を得たことはありません」という状況であつた。⁽¹²⁾

清水本之助の西安での窮状については、一九五四年二二月の衆議院特別委員会での久保田源次（元大連生活必需品倉庫株式会社支店長）の証言によつても確認できる。すなわち、「この方は終戦後関東局土木部長高等官一等の方で、年齢七十才ですが、いまなお職を与えられず向うの人事局の招待所で——どんな家に住んでいるかということとは皆さんの御想像できないところだと思ひますが、天井は紙天井、窓もガラス戸一枚なく、全部障子、なおドアも障子です。ほんとうにガラス一枚もない、下は土間で、いなかにおける百姓家の土間よりもつとひどく、湿気もひどい。それで、着かれてから今日まで約一年間この湿気のひどいこ

ろで生活されておられたので、非常にもからだも弱つておられて、ずっと今日まで六、七箇月間は寝ておられたような状態です。非常に気の毒な待遇を受けており、給与はずつと同じであります、やはり何ら職を与えられていないということ、本人にも非常に気の毒だと思つのであります⁽¹³⁾と述べられています。

このように清水は、給与は支給されているとは言え、仕事も与えられず、劣悪な居住環境のまま放置されたのである。

清水の証言の中で特に注目されるのは、大連在住の日本人技術者が、詐欺的手法で哈爾濱にまで連行され、その後各地での留用を余儀なくされた事実が訴えられていることである。少し長くなるがその部分を引用しよう。

一九四六年大連に於いて『中国経済建設学会』なるものが生れました。本会の目的は、中日技術者、科学者の提携に依つて、新中国の経済建設と中国と日本との親善友好を計るにありとし、その理事長は曹大章と云う人でありました。而して本会の総本部は北京にありて中国政府の特別なる支持あるいは勿論、莫德恵(？)を始め全中国各界の有力者の支持を受け、極めて、

強力なる学会であるとの振れ込みで、当時、大連に於ける、日僑の有力なる科学技術者百数十名を会員として招聘し、莫大なる経費を支出して居つたのであります。乍併、之は実は日僑科学者、技術者を引き止める為の偽瞞的手段にして「北京にその本部があり云々」の事は之れを悉く真赤な偽瞞であつた事が後になつて判明したのであります。

一九四七年四月頃曹大章理事長は全会員の過半数以上を引率して「ハルピン」に向つて出發致しました。その内の少数は始めから「ハルピン」勤務の約束で、その条件は之等の人々は、非常に優遇せらるべく、日常の生活は白米飯は勿論魚、牛肉も充分給せられ、八・一五以前の生活同様の生活を保証すると言う甘言を以つて誘惑されたものであります。(当時大連にては包米、高粱を常食としていたのであります。)

然るに之等の人々は、「ハルピン」に到着するや、初めの約束は全く偽瞞であつて喰うや喰はずの悲惨な生活に抛り込まれたのであります。

又一方一行の半数は「二―三週間北満地方の現況視察をなした上直ちに大連に帰り、之を資料として本格

的に中国の経済建設に着手するのである」との甘言に乗せられたもので亦「ハルピン」に着くや否や全く別個の機関に引き渡され、引率して来た曹理事長は、そのままどこかへか姿を匿してしまつたのでありました。

かくて取り残こされたる是等の人々は、始めて、欺瞞にかかつた事を知つたがその時は既におそく如何とも致し方なく之れ亦堪え難き悲惨な目に合い、或者は生死の重病に呻吟し、或る者（本人の大学同窓の今井栄量君、電気高級技術者）は遂に死亡したとの噂でありました。⁽¹⁴⁾

この清水本之助の中国経済建設学会（以下学会と略記）についての証言では、学会は日本人科学者、技術者を引き留めるための欺瞞的組織であつたとしており、各種回想録で語られる学会の実態について再考を迫る内容となつてゐる。

学会の会員となり、中国での長期留用を余儀なくされた笹倉正夫（元満鉄地質調査所調査員）は、学会について次のように回想している。すなわち、「大連には、四六年の春頃から、中国経済建設学会というものができて、日本人技

師を集めはじめた。学会は国民党にも共産党にも属さない無党無派だと称し、その看板が魅力であつた。日本語のうまい三十歳のインテリ主事曹大章の巧みな話術と手腕は、相当数の日本人を学会に吸収した。学会は、住宅支給、生活の保証という好餌を掲げ、『中国の経済建設策を立案する』という理想を旗じるしにしたので、純情な技師たちがここに集つたのも納得がいくのである⁽¹⁵⁾、と。また、中国共産党の強い影響下にあつた大連市で大連日僑勤労者組合委員長として、日本人対策で重要な役割を担つた石堂清倫（元満鉄調査部資料課勤務）によれば、「この学会は中国国民党左派莫德恵の系統であり、無党無派という人もあつたが、政府はどんな関係があるのか、われわれにはとうとうわからなかつた⁽¹⁶⁾」としてゐる。さらに、敗戦時の満鉄中央試験所長であり戦後も長く中国に残留した丸沢常哉によれば、学会は、「失職した日本の技術者および経済人と呼びかけ、会員になつた者には立派な住宅と高給を支給し、大連市の建設に協力させるほか、将来奥地の解放地区に派遣することが目的であつたようである。しかしその実体と資金の出処等は不明であつた。理事長は曹大章氏⁽¹⁷⁾と言ひ、外に日本語を能くする理事が二名いた⁽¹⁷⁾」とする。以上、三名

の回想では、学会は国民党左派あるいは無党無派と標榜していたが、その実体や資金の出処などは不明とされているのである。

なお、今井榮量まさかずの死亡については、他の資料でも確認できる。今井は電気技師で元満鉄中央試験所顧問であったが、学会の会員として哈爾濱に行った。そして、吉林市の化学工場に勤務していたが、病氣となり、一九四九年九月、吉林市の病院に入院し、尿毒症で死去した。享年六二歳であった。⁽¹⁸⁾

二 中国経済建設学会とは何か

(1) 設立経緯と参加会員

管見の限りで、同学会の設立経緯が最も詳しく語られているのは、学会に参加した坂本善三郎による回顧である。⁽¹⁹⁾

同回顧によると、その設立経緯は以下の通りである。曹大章は終戦前に満洲国から反動分子として睨まれ、北京に避難していたが、日本の敗戦を天与のチャンスとして、満洲における日本人技術者と提携し、中日合作で経済復興を図ろうと決心した。ただ、曹は日本人に知己が少ないため、兄貴分にあたる孫曉勃を説得して片棒を担がせることとし

た。孫は元満洲国官吏で、多年外交畑で活躍した経歴の持ち主であり、日本語も堪能で日本人の知己も多かった。二人は董という秘書を連れて奉天、新京、通化、撫順を回ったが、これらの地では優秀な技術者は四散しており、満洲には見切りを付けた。彼らは、撫順から古賀幸雄を案内者として、一九四六年四月一五日に大連に乗り込んだ。同月二三日、元満洲国役人の川畑友吉は当時の大連市政府社会局長・李鴻年と連れ立って浪速町に赴いた時、ばったり旧知の間柄の孫曉勃と出会った。翌二四日、曹、孫の二人は桃源台の川畑邸を訪れて、大連に來た目的を説明すると、二人の話しに川畑も共鳴し協力を約束した。学会の基本人員の詮衡を任された川畑は、元大連新聞社社長の宝性確成の協力を得て人選を進めた。こうして川畑の協力を得て学会創設のための会員勧誘などが実施され、五月一四日には大連市政府より学会創設についての認可が下りた。⁽²⁰⁾学会の理事は、曹大章、孫曉勃、韓静宇の中国人三名であり、学会本部は川畑友吉より提供された大連市桃源台の広壮な邸宅に置かれた。⁽²¹⁾そして、「大連市桃源台一帯はこの学会の巢窟であった。学会の看板が掲げている家は、保安隊からも完全に保護された。治外法権地帯という特殊扱いを受け

た場所である」と、された⁽²³⁾。

学会のバックについて、曹大章は坂本善三郎などに次のように語った。すなわち、「吾々は停戦後北京において東亜民族の大同団結を図り、殊に日本との提携によって支那を完全に開発すべく、莫德恵先生指導の下に本学会を成立したのであるが、将来は支那枢要の地に支部を設け、相互に連絡を取り、本学会設立の趣旨を全支部に向つて宣布せんと欲するのである」と。⁽²⁴⁾ただ、学会に関しては、「中国の人名録を繕いて見ても曹大章という名前が見当たらぬが、曹とは一体何者であるか、財源は何処から出るのであるか、如何なる後援者があるか」⁽²⁵⁾などの疑問が出されていた。

大連では学会を共産系の機関とする風評もあり、うっかり入会すれば帰国が出来なくなるのではないかと懸念も噂されていた。⁽²⁶⁾ただ、当時大連の日本人技術者は、それまでの住宅を大連市政府の政策で追われており、また失職状態にある者も多かった。学会は豊富な資金を持ち、住宅も確保し、日本人残留技術者及び経済人に住宅と高給を支給したので、多くの人々がその会員となったのである。⁽²⁷⁾学会創設当初に基本会員として招聘されたのは、川畑友吉、室性確成、田辺敏行（元満鉄理事）、出井盛之（元関東州経済

会理事長）、岡大路（元南満工専校長）、貝瀬謹吾（元満洲技術協会会長）、安達禎（元旅順工科大学長）、三浦義臣（元関東州経済会総務部長）であった。⁽²⁸⁾次に、技術者募集では、まづ旅大地区に所在した旅順工科大学（旅順工大）と南満洲工業専門学校（南満工専）が重視され、四六年六月には旅順工大元学長・安達禎を中心として同大教授の中から人選と勧誘が進められ、南満工専に関しては同校元校長・岡大路により人選と勧誘が行われた。⁽²⁹⁾

旅順では一九四五年一〇月にソ連軍により全日本人の退去が命じられ、旅順工大の教職員・学生は主に大連に脱出したが、生活は困難を極めていた。旅順工大教授の小倉勉は、安達元学長の勧誘により、四六年六月二三日に学会理事の孫、曹、韓に会い、七月一日に入会している。⁽³⁰⁾大連に所在した南満工専は、四五年一月に最後の卒業式を挙行して、四六年三月末には閉鎖され、中国側に引き渡された。その後、同年一月に元南満工専の校舎を利用して大連工業専門学校が大連市当局により開学され、校長には旅順工大卒業生の喬伝珏が任命された。また、旅順工大の教授数名がその教員として招聘されている。⁽³¹⁾

表1は、四六年九月に加入が承認された人々である。こ

表1 中国経済建設学会の新会員
(1946年9月28日決定)

氏名	元役職
渡辺猪之助	満鉄理事、工学博士
清水本之助	関東州庁土木部長、工学博士
佐藤 俊久	満鉄鉄道局長
高橋文太郎	満洲重機専務取締役
井上 愛仁	満鉄大連鉄道工場長
築瀬 成一	満洲油脂会社重役
高田 政吉	満洲化学工業染料部長
瀬川 敏彦	満洲曹達会社新京支社長
貴志二一郎	薬学博士
細川 良久	南満火薬製造会社重役
眞子 重路	内外綿金州支店長
吉澤篤二郎	東昇窯業工廠重役
江副勝太郎	大連窯業会社専務
古賀 光華	関東州鉱産試験所長
大塚要次郎	大連船渠鉄工会社工場長
川口 鼎	大連船渠鉄工会社社員
大戸 猷造	南満工專教授
辻 新	関東州庁水道課技師
吉田 重孝	関東州電機整備会社社長
前田 仲重	満洲製鉄探鉱部長
石橋由太郎	南満鉱業会社工作課長
山形鐘太郎	南満工専校長
千葉 喜美	中央試験所研究員
中島 洋吉	満洲製鉄土建部長
山崎 長七	南満ドロマイト工業重役

出所：「中国経済建設学会興亡史」(5) (『大連』第1巻第5号、1950年6月)18、19頁。

の頃には、学会の事業が着々と進み、入会希望者が増加して、すべての希望者を入会させることができなくなり、表1は優秀な技術者という条件で加入を承認した人々であるとされている。⁽³²⁾ たしかに、大連を代表する有力企業の社長・重役が名を連ねていることが確認できる。学会の会員数は、前述の清水本之助の文書では百数十名とされ、また笹倉正夫の証言では二、三百名と言われている。⁽³³⁾

(2) 北満派遣と長期留用の強制

中国経済建設学会による北満への技術者及び経済人の派

遣は、前後三次にわたり実施されたと言われる。⁽³⁴⁾

第一次派遣は一九四六年二月であり、「溝添栄二」(元ハ爾賓鉄道建設事務所長)を団長とした主として鉄道関係の技術者よりなる二〇名内外の人々であり、ハ爾賓に派遣された。⁽³⁵⁾ この第一次派遣でハ爾賓に送られた人物の証言が

「中共事情」に収録されている。この人物(コード番号、S一四一八)は、五四年当時四七歳であり、南満高専卒業後、技師として満鉄に入社し大連で勤務していた。四六年一月に中国経済建設学会に入り、同年末「ハルピン調査団」の一員として三カ月の約束でハ爾賓に向った。団長は「溝副英二」であり、技術者二名で構成された。四七年(正しくは四六年―筆者)二月二〇日、調査団は大連を出発し、鎮南鋪(正しくは鎮南浦―筆者)―平壤―清津―牡丹江を経て、四七年一月一二日にハ爾賓に到着した。⁽³⁶⁾

S一四一八の証言によると、ハ爾賓では調査団一行は東

北碚工処（旧三井物産建物三階）に移され、兵士の護衛付きとなり、身分調査が行われた。そして、三カ月の調査という約束が反故にされ、長期留用が強制されたのである。

本人を含む五名は鶏西炭鉱勤務を命ぜられ、一月二四日に鶏西に送り込まれた。彼ら五名は、大連の家族に自分たちの状況を知らせようと、白系ロシア人や朝鮮人に金銭を支払って手紙を託したが、一便も到着しなかった。ところが、事前に何の予告もなく、一九四七年六月九日には家族全員が鶏西に到着した。その家族たちの話しでは、四七年春には留守家族に向けて「ハルビン報告会」があり、学会からは「主人達はハルピンで幸福に暮して居り給料は四万円程度で自動車により送り迎えを受けている。何の不自由もなく唯家族の到着を待っている」と説明されたことである。実際には、留用者の生活は惨状を極めたものであったが、学会は家族をも欺いたのである。ただ、家族の到着のために、鶏西の留用者はこれまでの非協力的態度を改めざるを得なかった。また、家族とともに「第二次ハルビン調査団」なるものが来たが、比較的年配の人々が多かったとのことである。⁽³⁷⁾

S-四一八は、一九五一年五月まで鶏西炭鉱の総機廠に

勤務し、その後は同炭鉱の建設処設計科に所属して採炭関係機械の発注と据付の業務に従事した。そして、一九五三年に留用を解除され、第三次興安丸にて日本に引揚げた。⁽³⁸⁾ 彼は、学会の詐欺的手法について、「結局日本人技術者を狩り集めて鉦山開発に強制留用したもので我々は完全に騙されたのである」、「目的の為に手段を選ばぬ、中共のやり方に対し未だに我々は義憤の念を持っている」と述べている。⁽³⁹⁾

中国経済建設学会による第二次北滿派遣は、一九四七年四月に実施されたようである。笹倉正夫の回想記及び証言があるので、それを基に第二次派遣の内実を探ろう。笹倉は、四七年四月中旬、トラックに家財を積み家族と一緒に学会を出発する一群の日本人を目撃した。その人たちは「北滿要員」と呼ばれ、北滿に移住して中国の仕事に協力する人々と教えられた。後に笹倉は、哈爾濱でそれら技術者集団及び家族と出会っている。⁽⁴⁰⁾ すなわちこれが、第二次派遣であると考えられ、一団には今回の派遣技術者家族だけでなく、前述の第一次派遣分の家族も同行したものである。なお、この第二次派遣の人数は家族も含めて百名余りとされ、そのうち技術者は数十名であり、団長は岡大

路（元南満工専校長）であった。⁽⁴¹⁾ 満鉄の元大連電気区長の田代幹夫も、この派遣に加わったと考えられる。その回想記によれば、一九四八年春まだ浅き頃、岡先生を団長に三〇数名で哈爾濱に向ったとしている。⁽⁴²⁾ これは、正確には四七年であり、三〇数名とは家族を除いた技術者の数であろう。ともかくもここから、第二次北満派遣の技術者が三〇数名であったことが確認できる。

一九四七年五月六日には、曹大章を引率者として大連の技術者二〇数名が北満に向った。学会側の約束では、本派遣はあくまで「視察団」であり、その期間は二カ月間であった。それより一カ月ほど前に学会に加入した笹倉正夫も、視察団には地質専門家が欠けているからと曹大章に説き伏せられ、これに加わった。同団は第一次派遣団と同様のルートを辿り、五月一九日には哈爾濱に到着した。この視察団には福田熊治郎が団長格で参加していた。⁽⁴³⁾ 他方で、福田熊治郎の回想では、福田は第二団の団長に選ばれ、五月六日に技術者三〇余名とともに大連を出発し、二週間後に哈爾濱に到着したとしている。また、大連出発時の約束は、「満州の奥地の破壊状態を一カ月視察して大連に帰り、復旧対策を設計する」ということであったが、哈爾濱に到

着するや前言が取り消されたとしている。⁽⁴⁴⁾ おそらく福田は、前述の四六年一二月の北満派遣を知らなかったということであり、実際にはこれが第三次北満派遣ということであろう。

哈爾濱到着後、本視察団の人々も第一次調査団同様に鉦工処建物内の急造の部屋に収容された。そこには、四月に出発した「北満要員」の人々とその家族も居り、仕事も与えられず、ゴロゴロとしていた。そして、哈爾濱到着後三日目に、視察団の専門分野の代表七、八名に対して、曹大章より下記のことを言い渡されたのである。⁽⁴⁵⁾

私はこの三日間、東北行政委員会の責任者と会談を重ねてきました。この地の政府は、あなた方全部が、北満の経済建設に直接参加することを要請しています。今、北満では、共産党は国民党と内戦中で、工業生産は急を要し、皆さんが長期にわたってこれに協力することを求めています。これは拒むことはできません。私個人も反対することはできません。⁽⁴⁶⁾

この宣告は、晴天の霹靂であり一同に衝撃を与え、これが視察団全員に伝えられると、「曹の嘘つき」との怨嗟の声が皆から発せられた。⁽⁴⁷⁾

だが、笹倉はその回想記で、曹大章が日本人技術者を騙したとはせず、彼を擁護している。すなわち、「曹は親共派であるが、共産党員ではない。(中略)彼は己の事業欲、出世欲のために、優秀技師を集め、学会を成長させようとしたのだろう」、「政府の前に立った一人曹大章は弱い存在である。東北行政委員会はまだ地方政権ではないが、共産党を代表する権力機構である。その前に立った私的結社の建設学会には何の力もない。無党無派などといってみても、支配権力が容認して初めて効力があり、支配者がノーといえば直ちに空念仏となろう」と述べている。⁽⁴⁸⁾つまり、笹倉は学会が無党無派の私的団体との主張を信じ、共産党当局と日本人技術者との板挟みにあった曹に同情を示しているのである。この笹倉の主張は真実なのか、学会は本当に無党無派の私的団体であったのか。あるいは、清水本之助が主張するように、日本人技術者を欺くための共産党による虚偽の組織であったのか。これは大きな疑問である。実は笹倉は、「中共事情」に所載された証言の中では、回想記とは異なる表現をしている。次に、その内容を検討して、中国経済建設学会と曹大章の謎に迫ろう。

(3) 中国経済建設学会の謎

笹倉正夫は、「中共事情」所載の証言において、中国共産党により次のような日本人留用工作が展開されたとしている。

(一九四六年―引用者)十月頃から中共側の関東地区政治委員廖華氏が科学研究所に顔を出して来て、日本人技術者に対する留用工作が漸次表面化して来た。科学研究所の成立目的は技術引留めの一環であることが臆気ながらわかって来た。

研究所とは別箇に中共側では桃源台に旧日本住宅を占めて「中国経済建設学会」を作り、研究所以外の日本人技術者を吸収した。物的給与は研究所よりも遙かによかった。又建設学会は無党無派を看板とし、さまざまのインテリに魅力をまいた。電気、化学、土木、建築、機械、採鉱、冶金等の技術者と此の学会に吸収されていた人々は二、三百名に上るであろう。⁽⁴⁹⁾

この科学研究所(科研)とは、中央試験所、調査部、地質部、鉄道技術研究所などの満鉄文化機関八機関を統合して一九四六年一月に設立されたものであり、中ソ合弁の中国長春鐵路公司大連鐵路局の管轄下にあり、管理官は白系

ロシア人地質学者エゴロフであった。一九四七年一月の大連からの日本人の第一次引揚の前に、廖華は科研に副管理官として着任したのである。そのねらいは、科研の日本人技術者の留用工作であった。⁽⁵⁰⁾

ここで注目すべきは、笹倉は学会を明確に「中共側」により組織されたものであると言っていることである。学会は、所属先が閉鎖され無職となつてしまった日本人を組織しようとして企図したものである。丸沢常哉の回想では、曹大章は廖華と連携し科研でも留用工作を行っている。すなわち、「日本人の引揚げが始まると曹理事長は科研に現われ、廖華さんと共に日本人を集め、引留めの演説をした。曹氏は驚嘆すべき大雄弁（日本語）をふるって聴衆を魅了したので、帰還を思い止まる者も出来た」としている⁽⁵¹⁾。このように、曹大章は共産党員の廖華とともに科研でも日本人引き留め工作を行っており、学会は共産党や大連市当局と連携して動いていたことは確実である。たしかに、多くの技術者に高給を支給することが私的組織で可能であったかは疑問である。ましてや、当時大連市は住宅調整政策（それまでの住居から日本人を退去させ、それを中国人市民に分配すること）の最中であり、高級住宅を日本人に提供す

ることは、共産党及び大連市当局の許可が必要なはずである。⁽⁵²⁾ 国民党との関係が疑われる団体に、共産党及び大連市当局がそれを許可する可能性はほとんどなかったのではない。以上の点からも、学会は国民党寄りあるいは無党派の私的組織ではなく、背後に共産党の存在があったと考えられるのである。おそらく笹倉は学会が共産党により組織されたものであることを知っていたが、回想記ではその点を曖昧にしたのであろう。

実は、学会が中国共産党系であることを主張する回想が存在している。それは、日僑連絡事務所嶺前区（学会本部所在の桃源台は同区内）の責任者として、留用技術者と深く関わった玖村芳男（大連で使用した仮名は川村薫）の回想である。玖村は、「曹大章という人がどういふ人かはよく知らない。中国共産党の指導の下で活動していることは明らかだが、関東公署民生局の張致遠等とは違う系統のようだった」と述べている。このように玖村は、学会及び曹大章が共産党の指導下にあると明確に述べているのである。学会の背後に中国共産党の存在があったことを示す資料は他にもある。まず、一九四七年五月に曹大章が失踪した後、学会の代表者となった程公譔なる人物の存在である。

大連引揚者の機関誌『大連』には、程公謨は人格者として会員から敬慕された人物であり、最近の消息として、上海国華銀行の会長となり、目下香港の同支店に所用のため出張中であるとされる⁽⁵⁴⁾。この程公謨とは、本名・陳孚木ではないかと推測される。陳は、汪精衛政権下で活動した共産党のスパイであり、五重スパイとも称される袁殊の仲間であった。彼は、字が「公謨」であり、戦後上海より逃れ新四軍に入り、大連に行き、その後は中共軍と共に南下して、国華銀行の董事長となり、五一年には香港に向いたとされている⁽⁵⁵⁾。「公謨」という名前、並びに国華銀行での董事長（会長）などの共通点から、程公謨すなわち陳孚木と推測されるのである。そうなると、学会の背後には共産党の特務機関が動いていた可能性がある。

また、陳孚木と共に汪精衛政権の中でスパイとして活動した袁殊も、曾達齋と改名して大連において活動していた。彼は一九四七年七月に大連に入り、中共華東局大連工委に所属し、馮鉉（一九四七年五月より中共東北社会部副部長兼大連情報処処長）の指導下で中共旅大地委財經研究室副主任となった。この袁殊の活動の場は、博古堂及び新達商行であった⁽⁵⁶⁾。丸沢常哉は、この博古堂は、李亜農（京都大学

留学、新四軍政治部敵工部副部長、華中建設大学校長）という人物が表面に出て、中国美術品の散逸を防ぐという名目で活動し、さらには科学研究所に所属していた日本人技術者と協力して無水酒精やDDTなどの生産を行い、日本人技術者に自活の機会を与えたとされている⁽⁵⁷⁾。ただ、阿部良之助（満鉄中央試験所次長兼燃料課長）は、博古堂には李亜農だけでなく、実は曾達齋もスタッフとして勤務していたとしている⁽⁵⁸⁾。このように博古堂は、中国共産党の特務機関である社会部の指令のもとに組織された偽装組織である可能性が高く、学会もそれと同様の組織であったと推測されるのである。

さらに、学会には後に知日派として日中関係の舞台で活躍する蕭（肖）向前がいたとされ、これも学会の背後に共産党の存在があったことを示す証拠となる。編集者・森戸陸子は、高橋庄五郎（大連日本人消費組合の業務部長、引揚後中日貿易促進会の総務部長、貿易商社・和光交易の創業）からの聞き取りとして次の事実を記述している。すなち、「日本人高級技術者を組織していた『中国经济建設学会』は、解放後の中国の経済建設のために日本人技術者の残留を推進しようとする組織で、中国共産党に組織されている

ようだった。そこに肖向前(後の中日覚書貿易東京事務所首席代表)がいた。高橋が学会を訪れると、給仕のような少年が出てきた。来意を告げると、その少年が奥に入って都合を聞いてくる。その少年こそ、のちの大華貿易の小山弘取締役であった。肖向前には会わなかったが、小山は高橋のことをよく知っており、肖向前がそこにいたことを、あとになって話した⁵⁹としている。このように、高橋庄五郎は学会が共産党に組織されたものであることをなけば認めている。

蕭向前は、一九一八年に奉天省台安县に生まれ、一九三八年より満洲国公費留学生として東京高等師範学校及び東京文理科大学に学び、四一年には中国共産党が指導する地下革命組織の「新知識研究会」に加入した。四二年一〇月に帰国し、瀋陽で共産党の地下活動に従事し、四五年に共産党に加入している。四六年に中共中央社会部は潘漢年を東北に派遣して、情報工作を担当させた。その際に、瀋陽の情報工作の責任者・張為先の指示により、蕭向前は潘漢年を自宅に住まわせ、その活動を援護した。さらに、同年五月には大連に行き、銀行経理と身分を偽装して、地下活動に従事したとされる⁶⁰。おそらく、大連において蕭向前は

偽名を用いていたと考えられるので、小山弘が彼の実体を知るのは戦後中国貿易に関係してからのことであろう。ともかくも、蕭向前の経歴から考えても、彼が学会で活動していたという情報は確度が高い。

以上のように、陳孚木と蕭向前が学会に関係していた事実を踏まえると、学会とは中国共産党の特務機関・社会部の指令により作られ、対日本人の特殊工作を担当する偽装組織であった可能性が高いのである。

では、学会の理事である曹大章、孫曉勃、韓静宇といかなる人々なのか。三人に共通するのは日本語が堪能であるということであり、また孫曉勃が満洲国の官吏として外交畑で活躍していたことは真実の可能性が高い。さらに、蕭向前が学会に関係していたことを加味すると、この三人は東北籍の日本留学経験者を主体に組織された中国共産党の地下組織・東北救亡総会の関係者ではないかと推察される。一九三八年二月、東京において東北留日青年救亡会が設立された。四〇年にはメンバーの多くが帰国したために、同年四月、同会が東北青年救亡会と改称され、総部は奉天に置かれ、中共中央晋察冀分局社会部の指揮下に入った。その任務は、満洲国の軍事、政治、経済などの戦略的情報

を収集することであった。四二年三月には、晋察冀分局社会部より人員が派遣され、共産党支部が創設され、七〇数名の会幹部が入党した。また、会は晋察冀辺区政府東北救亡総会に改組された。本会には、満洲国のエリート青年が組織され、満洲国国務院総理・張景恵の息子張紹紀、甥張紹維なども会員であり、蕭向前もそのメンバーであった。彼らは合法的な社会的地位を利用して、各地で情報収集にあたった。⁽⁶¹⁾この東北救亡総会ならば、日本語の堪能な人物や満洲国官吏経験者を多数擁していたと考えられるのである。

さて、玖村芳男の回想によると、学会は後に大連市政府当局の指示により「関東技術研究会」（略称・技研）に改組され、同会には大連に残った学会メンバーとその他の技術者が集められたとされる。玖村が技研の秘書主任となり、事務所は大連工業専門学校（元南滿工專）の建物の一部が使われた。また、学会の留守家族の世話は、当初は大連市政府民政局が見ていたが、後に技研の業務となった。そして、一九四八年五月には、技術者の家族三八人が哈爾濱に送られたとされている。⁽⁶²⁾

三 哈爾濱に送致された人々

中国経済建設学会により合意または詐欺的手法で哈爾濱に送り込まれ、長期間大連に戻らなかった人々のリストが表2である。上述のように三次に渡る派遣で七〇数名の人々が北滿に送られたと推測されるが、表2に記載されているのは合計四一名であり、記載漏れの人々も多いと考えられる。また、長期留用とはならず比較的短期に大連に戻った人々もいたのであろう。このうち、今井栄量と石丸市次郎は現地において死亡したとされる。⁽⁶³⁾今井栄量の死亡については既述の通りであり、石丸市次郎の死については後述する。丸沢常哉によれば、「岡大路（建築）高野気次郎（機械）福田熊次郎（応用化学）井上愛仁（機械）江副勝太郎（窯業）等の老大家が一行に参加した。（中略）かかるにこれらの諸氏はハルピン到着後諸地に分配され（たとえばソ満境の炭鉱へ）家族を呼びよせるどころでなく、非常な苦難をなめた」とされている。⁽⁶⁴⁾表2からも、多くの人々が中ソ国境近くの鶏西炭鉱に送られていることが確認できる。

表2の人々の中で、内閣総理大臣官房調査室の外郭団体

表 2 中国経済建設学会による北滿派遣技術者のうち長期未帰還者

専門分野	氏名	生没年	最終学歴	職歴	留用時の所属	引揚後の所属	典拠
農業	鷲尾弘門	1890-	北海道大学農学科第一部卒	農商務省工務局権度課→南滿工專教授		名城大学教授	③⑫
土木	岡大路	1889-1962	東大建築科卒	滿鉄地方部建築課長→南滿工專校長兼教授、関東州都市計画委員会委員→滿洲国建築局長			③④⑭
	仲岡利三郎	1907-	南滿工專建築科卒	滿洲土木(株)取締役兼建築部長→南滿工專教授			③⑥
採鉱冶金	中島利彦			南滿工專教授			⑥
	林大輔	1907-	旅順工大機械工学科卒	滿洲炭鐵→滿洲縣金屬→新京工大教授→旅順工大教授		秋田大学鉱山学部教授	④
	古橋透道						
	笹倉正夫	1906-	京大地質学鉱物学科卒	滿鉄地質調査所調査員→滿鉄副参事、調査局鉱床地質調査室勤務		間組海外工事局顧問	④⑦
	埴谷正雄						
	時通			東京府河川課→関東州土木課→滿鉄地質調査所			⑮
	青木正						
	黒葛原繁						
	筑後孝信	1900-	旅順工科学堂採鉱冶金科卒	南滿工專教授兼同附設臨時技術員養成所講師			④
	長崎誠治						
荒谷一雄							
浦田安栄							
神出福吉				滿洲鉱山株式会社			
	木村初義						⑬
	島倉政平						
応用化学	高田政吉	1892-	九州帝大工学部応用化学科卒	大和染料(株)奉天工場長→滿洲化学工業(株)染料部長			①⑤
	吉沢篤二郎	1890-	東京高等工業学校卒	滿鉄中央試験所職員→南滿洲硝子(株)取締役兼工場長→東昇窯業工廠重役			①⑤
	江副勝太郎			大華窯業会社専務			⑤
	築瀬成一	1886-	東大農芸化学科卒	滿洲油脂(株)取締役技術部長兼大連油脂工場長			④
	加藤薫						②

	弦巻捨夫						
	下元太郎	1894-	京大工学部卒	滿蒙殖産(株)技師長兼研究室主任			④
	江崎源藏						
	今井留雄						
機械	井上愛仁	1890-1979	大阪高等工業学校機械科卒	滿鉄沙河工工場→滿鉄道研究所調査役→滿鉄大連鐵道工場長			④⑧
	高野気次郎	1887-	東京高等工業学校機械科卒	滿鉄大連鐵道工場技師→滿洲機械工業統制組合常務理事兼生産部部長	②		④
	菊池孝一郎						
	廣瀬次郎						
電気	今井栄量	1887-1949	九州帝大工科大学電気工学科卒	滿鉄電気作業所→南滿洲電気会社常務取締役→滿鉄中央試験所顧問			①⑨
	井上嘉三			南満工専教授	②		⑥
	田代幹夫			滿鉄大連電気区長			⑩
	守瀬亮						
	小山修						
	木瀬弥榮						
	東亮夫					①	
紡織	福田熊治郎	1884-	東京高等工業学校染織科卒	大和染料(株)創立→滿洲化学工業(株)取締役、関東州庁方面委員			(株)ケントク顧問 ④⑪
	石丸市次郎						
	柳内穎一		桐生高等工業学校卒	内外綿金州支店勤務			⑪

出所：専門分野、氏名は、「大連殘留技術者の動靜」フカシヤ委員会の報告(「大連」第2巻第5号、1951年5月)43頁。最終学歴、職歴、引揚後の所属は、典拠欄で示した。①竹中蠶一編著「人名事典『滿洲』に渡った一万人」(皓星社、2012年)、②昭和一二年版『滿洲紳士録』(1937年)(「日本人物情報大系」13、皓星社、1999年)、③『滿洲紳士録』第三版(1940)(「日本人物情報大系」14)、④『滿洲紳士録』第四版(1943年)(「日本人物情報大系」15)、⑤「中国経済建設学会興亡史」(5)(「大連」第1巻第5号、1950年6月)、⑥坂本善三郎「中国経済建設学会のこと一回顧録・その二」(「大連」第10巻第7号、1959年7月)、⑦佐倉正夫「人民報日記」ある科学者の証言(「番町書房、1973年)、⑧「滿鉄鉄道技術研究所史」(滿鉄鉄研会、1990年)、⑨高良寿美子「今井栄量顧問をしのぶ」(「滿鉄中試会々報」第31号、2005年12月)、⑩滿鉄会編『滿鉄社員終戦記録』(1997年)、⑪「われらの福田老」(大和染料社旗会、1979年)、⑫野中時雄「私の滿鉄での調査の跡」(兵庫農科大学農業経済)第3号、1958年12月)、⑬中共事情(陸毅483)「東北地質調査体験記」(版)(1955年1月15日)、⑭西澤泰彦「東アジアの日本入建築家―世紀末から日中戦争―」(柏書房、2011年)、⑮中共事情(陸毅第66)「大連及び山東における留用状況」(版)(1953年11月2日)。また、留用時の状況は、⑯は1947年7月頃、崔倉正夫が瀋陽西展館に送致された時に、同地に居た人々であり(⑬23頁)、⑰は瀋陽の東北工業部有色金属管理局勤務者である(朱福栄「東北非鉄金属管理局の日本人たち」中国中日関係史学会編・武吉次朗訳「続新中国に貢献した日本人たち」日本橋報社、2005年、127、128頁)。

により聞き取り調査がなされ、「中共事情」にその内容が収録されているのが、岡大路、笹倉正夫、峠通の三名である。彼らについては、次章で詳述することとして、まずこの三名以外の人物について哈爾賓送致後の動向を探ろう。

各種資料からその動向がつかめるのは、以下の人々である。まず、福田熊治郎の足跡については、雑誌『大連』では次のように報じられている。すなわち、福田は中国経済建設学会に入り紡織分室の主任となり、昭和二三年（正しくは二二年―筆者）五月に約二ヵ月間との約束で哈爾賓調査団に参加し、紡織分室の石丸市治郎、^マ由比忠之進、柳内穎一、小島金次郎などと共に哈爾賓に向いたが、そのまま残留を余儀なくされた。石丸は翌年五月に牡丹江において病死し、由比、小島は二四年一〇月に帰国した。現在残留しているのは、福田、柳内の両氏である。⁽⁶⁵⁾福田は知人に宛てた手紙の中で、「例により私は最高の待遇を受けて、大切に扱われていますので、生活上の心配は少しもありません」と述べ、技術者として最高ランクの総工師の地位にあるとしている。また留用以後の経緯については、「哈爾賓には家内が来た年の七月まで居まして吉林の解放と共に吉林に転出し、同年十一月瀋陽解放とともに瀋陽に転出

し、色々の復興に工作し、染料工廠を完成して今日では中国の硫化染料の完全なる独立を出現しています。一昨年三月から五月まで大連より呼ばれて旧大和染料の復興をやりました」としている。⁽⁶⁶⁾なお、前掲『われらの福田老』では、福田の留用後の履歴は、一九四八年吉林電化工場の復興、四九年瀋陽染料廠主任兼総工師、四九年二月大連大和染料会社の復旧、五三年三月天津を経て帰国とされており、上記の手紙の内容と符合する。

哈爾賓送致直後、福田などの留用者には、哈爾賓市内のガス会社のガスからベンゾールを回収する仕事を与えられた。福田が委員長、築瀬成一が副委員長、委員には井上愛仁、岡大路、吉沢篤二郎がなり、その他若手二〇名位が参加した。それとは別に福田は、ガス会社工場敷地の片隅にドラム缶を並べて硫化染料の生産に乗り出した。⁽⁶⁷⁾福田は哈爾賓において満洲化学工業(株)生産の石炭酸を見つけ出し、その他の原料は代用品を色々工夫して、硫化染料の生産に成功し、中国当局を驚かせた。そして、中国東北政府第一号をもって表彰されたとされる。⁽⁶⁸⁾

以上のように、福田熊治郎は硫化染料生産に関する自身の知識・技術を生かすことができ、高齢にもかかわらず活

躍し、吉林、瀋陽、大連などの工場復興にも大きく貢献して、中国側からも高い評価を受け厚遇されていたことが確認できる。

高野気次郎は、一九五一年末、留用先の鶏西で軽度の脳溢血（顔面、手、足の感覚が微かに麻痺程度）を起こし、半年ほど大連で静養後、五二年七月頃から元大連機械製作所に転動したとされる。⁽⁶⁹⁾井上愛仁は、鉄道車輛用金属材料の研究で顕著な成果を上げた技術者であったが、四七年五月に北朝鮮経由で哈爾賓、牡丹江と移動したのち、四八年に大連に戻り、五三年一二月に家族とともに重慶に移され、五五年二月に塘沽から興安丸で帰国した。このように井上は、四八年には大連に戻ることができたが、大連で勤務していたために清水本之助と同様に、五三年末には遠方へ送られた訳である。なお井上は、大連に戻ってからは元大華鋳業株式会社勤務したが、血圧が高く休養したり勤めたりにしていると報じられている。⁽⁷⁰⁾

林大輔は、哈爾賓の東北鋳工処から吉林化工廠を経て、瀋陽の東北工業部有色金属管理局で勤務し、一九五三年夏に引揚げている。⁽⁷¹⁾高田政吉は、満洲化学工業（株）の染料部長であったが、終戦後公安総局の染料工廠に勤務し、後に

中国経済建設学会の応化分室主任に転任し、四七年五月哈爾賓調査団に参加し哈爾賓に行き、その後瀋陽から錦西へと転々とし、五一年当時は錦西工場に勤務していた。⁽⁷²⁾田代幹夫は、吉林化工廠での留用となり、カーバイド工場の電気炉の復旧に従事した。工場の生産再開は一九五二年末であり、製品は過去のものに優るとも劣らざるものと評価され、表彰を受けた。留守家族は老虎灘近くに集結して暮らしていたが、後に吉林に連れて来られた。そして五三年春に帰国している。⁽⁷³⁾

鷺尾弘円については、満鉄の農村実態調査で優れた業績を上げた野中時雄（敗戦時、大連農事株式会社社長）の回想の中で触れられている。野中は、曹大章より依頼されて農業経済建設の調査立案の主任を務めた。こうして野中により集められた一〇数名の中に、横田廉一（鳥取大学教授）、三浦蜜成（秋田農試）、鷺尾弘円（名城大学教授）などがいた。野中は四七年三月に引揚げたが、鷺尾は吉林などに行き数年間残留したとされる。なお、野中は、学会は当初は国民政府側の組織であったとしている。⁽⁷⁴⁾

最後に、表2に氏名の記載はないが、中国経済建設学会に所属し、曹大章の求めに応じて哈爾賓に向い、現地です

業の死を遂げた柘本なる人物を紹介しよう。峠通（経歴は後述）の証言では、哈爾賓瓦斯重役の柘本は終戦時大連に逃避したが、その後哈爾賓に連れ戻され、瓦斯設備の復旧指導を命じられた。だが、労働者により作業の発展を妨害する人民の敵と告訴され、法院に連行される途中馬車上で暴民に殴殺され、かつ財産を没収されたとしている。⁽⁷⁶⁾ 植谷正雄は、柘本は学会に加入し、その要請で植谷たちより一年ほど前に哈爾賓に向ったが、植谷たちが哈爾賓に到着してまもなく、人民裁判にかけられ処刑されたとしている。

哈爾賓市工破処の劉処長の説明では、柘本は国民党の反動分子として工場破壊の目的で工場に派遣されたものであり、その罪状は工場破壊の陰謀、公金横領、労働者への高圧的対応などであるとされた。しかし、植谷は哈爾賓を離れる際に、この事件が冤罪であることを聞いたとしている。すなわち、この事件の真相は工場長自身の腐敗墮落にあり、工場長が自身の問題を柘本になすりつけるために、労働者達を扇動して起こしたものであるとしている。⁽⁷⁶⁾ また笹倉正夫は、柘本の実名は出していないが、哈爾賓瓦斯会社の重役か技師長だった人物が銃殺されたとしている。その人物は、曹大章にすすめられて大連から北満要員として哈爾賓

の元の職場に戻った。戻ったものの、その人物は昔流に工員に命令したり、荒い言葉で叱ったりしたために、工員たちが騒ぎ出し、最後は銃殺されてしまい、工員は何の咎めも受けなかったとのことである。⁽⁷⁷⁾ 以上のように、柘本は正式の司法手続きを経ることなく人民裁判にかけられ、殴殺あるいは銃殺という非業の死を遂げたことが確認できるのである。

四 留用者の証言

(1) 岡大路

岡大路の証言は、「中共事情」に掲載されている。⁽⁷⁸⁾ 本資料では、実名は伏せられOTRと記載されているが、南満工専校長、満洲国「建設局長」（正しくは建築局長―筆者）などの経歴から岡大路と推定できる。本資料によれば、戦後の岡の行動履歴は次の通りである。すなわち、終戦後に家族の居た大連に戻り、同地で「中国建設学会」に入り、東北経済復興のために残留することを決意した。一九四七年五月には、中共の招聘により北朝鮮経由で哈爾賓に移動し、同地で一年半を過ごし、瀋陽解放後の四八年一二月に瀋陽に移り、四九年初頭には工業部機械管理局の総工程師

となり、五三年一〇月に帰国とある。⁽⁷⁹⁾

本資料において岡は、中国残留の理由について、「終戦直後の在大連日本人の大部分は『内地へ帰る』と云って帰国ばかりを念願していた様に思はれたが、私は之と反対に『東北の経済復興には其の産みの親である邦人技術者の参加が必ずや必要である』と云う堅い信念を持っていた。私が『中国建設学会』に入ったのも同様の趣旨である」と述べている。ただ、なぜ岡がこのような「堅い信念」を持つに至ったのかについての説明はない。この点について「中共事情」調査者は注記として、「本供述者は在満四十年に近く、又クリスチャンの技術者であるが、この事が右の様な信念を持たしめた一半の動機ではないか」と推測している。⁽⁸⁰⁾

すなわち、岡は一九二二年に満鉄に入社し、二三年には満鉄地方部建築課長に就任するなど、一貫して満鉄の建築畑を歩み、関東州及び満鉄付属地のインフラ建設に深く関わった。⁽⁸¹⁾さらには、南満工専校長、満洲国建築局長という要職も歴任している。こうした経歴により、岡は中国東北でのインフラ建設に大きく貢献したとの自負を持ち、その復興のためには残留をも厭わないとの考えを持つに至った

のではないかと推察される。また、岡はカトリック信者であり、人格者であり人望もある人物であるとされており、そうした岡の人間性が、労苦が予想される留用に敢えて踏み切らせた理由の一端かも知れない。他方、岡は中国の伝統的建築や造園にも関心が深く、『支那庭園論』（東亜建築撰書六、彰国社、一九四三年）という著書があり、引揚後は瀋陽などの伝統的建造物の最近の状況の紹介を行っている。⁽⁸²⁾こうした、中国の伝統文化への理解と愛着も、岡に留用を決意させた一因であると考えられる。

中国経済建設学会に関して、岡は、「終戦後大連の各種技術者約一〇〇人で組織された民主的『グループ』で、学会の会長も無党無派の中国人であり、当初は中共とは全然無関係であった」と述べるのみである。⁽⁸⁵⁾ここには、会員の勧誘を行い多くの技術者を学会に引き込んだ自身の責任、ならびに团长として技術者及び家族を哈爾濱にまで連れて行き、彼らに長期の留用を余儀なくさせた反省などへの言及は見られない。

(2) 笹倉正夫

岡大路とは対照的に、自身の留用体験を雄弁に語ってい

るのが、笹倉正夫である。笹倉は既出の回想録『人民服日記』以外にも、「中共事情」に下記のような多くの証言を残している。まず、笹倉の体験記録としては、①～⑨の九冊があり、うち一冊は東洋文庫、外交史料館ともに所蔵しておらず、未見である。その他、笹倉自身が関係した東北の地質事業などについて述べたものが①～⑤の五冊である。

① 中共事情（陸第四八三）「東北地質調査体験記」（仮）、昭和三〇年一月一日

② 中共事情（陸第五〇二）「中共留用技術者の体験録」（仮）、昭和三〇年二月九日

③ 中共事情（陸第五二二号）「瀋陽の有色金属管理局」（仮）、昭和三〇年三月一日

④ 中共事情（陸第五三六） 欠

⑤ 中共事情（陸第五六五）（内容タイトルなし）、昭和三〇年五月一日

⑥ 中共事情（陸第六〇一号）（内容タイトルなし）、昭和三〇年六月二三日

⑦ 中共事情（陸第七〇九号）『東北の有色金属鉱山に於ける探鉱』（中共留用技術者の生活体験記録「其の七」）、昭和三〇

〇年一〇月一日

⑧ 中共事情（陸第七一〇号）『ソ連地質調査傾向の一端』（中共留用技術者の生活体験記録「その八」）、昭和三〇年一〇月二日

⑨ 中共事情（陸第七二二号）『東北有色金属鉱山における探鉱の重点化』（中共留用技術者の生活体験記録「その九」）、昭和三〇年一〇月二三日

① 中共事情（陸第四五二）「東北における鉱山事情」（その一）（その二）、昭和二九年十二月一日

② 中共事情（陸第六六一号）「中共における政治と技術及びソ連人技術者について」、昭和三〇年九月五日

③ 中共事情（陸第六八六号）「中共の政治学習」、昭和三〇年九月一日

④ 中共事情（陸第七三二号）『中共における地質事業発展の動向』（その一）、昭和三〇年一〇月二六日

⑤ 中共事情（陸第七三三）「中共における地質事業発展の動向」（その二）、昭和三〇年一〇月二八日

上記の「中共事情」各号においては、被調査者の氏名は秘匿されている。だが、調査者執筆の「調査報告」には、

「本情報源は、中共重工業部総工師、兼地質専門家として、主として東北における有色金属資源の開発生産に重用せられ、幾多重要鉱山の開発、技術者の育成に従事し、五二年末には、中共第一次五ヵ年計画案の立案にも参画し、且つ進歩的幹部として指導的立場にあった」(③、五頁)とある。

『人民服日記』によれば、笹倉は、地質学を専門とする地質調査の技術者であり、国共内戦期東北で多くの炭鉱、非鉄金属鉱山の資源探査に従事した。また、東北部の内戦終結後には、瀋陽に設立された東北工業部有色金属管理局の総工師兼専門家として、非鉄金属の鉱山開発と人材育成に大きく貢献した。こうした笹倉の経歴から、この被調査者は笹倉正夫と確定できるのである。

『人民服日記』「あとがき」には、「昭和二十九年九月二十九日私は郷里に帰った。それから半年休養した中で、私は九年間の中国滞在記を、生々しい記憶の中で、メモとして綴った」とされており、そのメモが①～⑨の体験記録であろう。なお、『人民服日記』はその後二〇年近く眠っていたメモを整理、縮小したものであるとされる。

この笹倉の証言を用いて、東北工業部有色金属管理局の業務実態、及びそこでの日本人技術者の役割・貢献を解明

することは重要な課題であるが、紙幅の都合でそれは今後の課題としたい。⁽⁸⁶⁾ここでは、笹倉の足跡をたどり、いくつかの重要事項を指摘する程度に留めたい。

ハルビン送致後の笹倉の足跡は次の通りである。一九四七年五月にハルビンにおいて曹大章より長期残留が宣告された直後、笹倉は曹大章と共にハルビン郊外の邸宅に移り、『東北鉱産誌』の編纂に従事させられた。これは、学会に参加した大連の技術者が東北鉱産資源について執筆した日本語原稿を、中国語に翻訳して一冊の本にまとめる業務であり、笹倉はその翻訳の助言を行った。そして、謄写版印刷で出来上がった本には、曹樹人(曹大章のハルビンでの呼び名)の名前が記された。さらに、四七年七月に笹倉は、鶏西に送られ、鉱工処研究室の所属となり、滴道炭鉱や麻山鉄鉱・炭鉱の地質調査に従事した。翌四八年一月には吉林省の夾皮溝鉱山に移動させられ、同年四月まで同地で鉱脈調査を実施した(『人民服日記』二五～一五〇頁)。

この夾皮溝鉱山は、かつては満洲鉱山株式会社の経営になる金山であり、一九四八年当時全設備は無傷で完全に保存されていたとされる(『人民服日記』一一六、一一七頁)。具体的には、「選鉱場、坑口、建屋何一つ昔のま、に保存

され、此の年の初めから正規の浮遊選鉱を初めている」とされ、「夾皮溝こそ、有色金属経営法のメッカ、中共式に云えば、有色金属鉱山経営の延安であった」としている（①、五四頁）。ただ実際には、選鉱場は破損し、モーターも持ち去られており、笹倉の到着前に、選鉱場の修復を指導したのは大石高行などの日本人技術者三名であった。大石高行などは、学会の技術者とは別に、四七年八月に大連より吉林省に向ったものであり、吉林省当局の要請に応じた合意の上での留用であった。その一行は、技術者四〇名、家族を含めて八〇名であり、延吉での政治学習を経て、大石など三名が本鉱山に配置されたのである。本鉱山において、笹倉は二ヵ月間にわたる鉱脈調査を実施し、鉱山の復興と開発に大きく貢献した。ここで産出された金塊は、「四八年には国民政府の外国為替を横から買取するに用いられ、四九年には東北の各有色金属鉱山を回復する資金に使用された」（②、三九頁）とされる⁽⁸⁶⁾。このように、同鉱山は共産党の国共内戦期の重要な財源、外貨獲得源であったと推測されるのである。

その後、笹倉は天宝山（延吉近くの銅鉱山）を経て、一九四八年八月には吉林市に移動し、九月にまた夾皮溝鉱山

に入った。今回は、笹倉には地質調査だけでなく、地質教育という新しい任務が加わった。最初は三人の青年が長春方面から送られて来て、まもなく四平・清原からの青年二〇名が加わり、その後も学生が増え、夾皮溝は一時期鉱山学校のような観を呈したとされる。同地での地質教育は、高校卒あるいは中退の学生に二〜三ヵ月の短期訓練を行い、坑内の調査ができる程度の技術員を養成するのを目的とした。しかし、教育は予想以上の成果を上げ、学生中から二〇名の優秀者を選抜し、地質専門家とするために瀋陽に連れて行くこととなった。笹倉は四九年三月まで同鉱山に勤務し、その後選抜された学生と共に瀋陽に移った（『人民服日記』一五一〜一七〇頁）。

この地質教育について、「中共事情」ではより詳しく述べられている。それによると、四八年一〇月中旬に哈爾濱方面から若い青年が一〇数名来て、笹倉に地質の講義が命じられた。その際は週二、三回不定期に講義し、坑内実習と岩石鑑定実習を主力として教えた。さらに、同年一二月末には、長春及び清原鉱山から、二回に分けて一〇〇余名の学生が入山して来た。その大部分は、満洲国時代の中学・高級中学を卒業あるいは中退した青年であるが、少数

の大学卒程度の者がいた。その中には、国民政府時代の長春大学で二年間地質学を学んだ学生が二名おり、彼らは留用された日本人教員の講義を受けていた。その内の一名の田子良は、五二年には中央政府の有色金属工業局地質処の探鉱科長となっている。四九年一月から三月まで技術訓練班が開講され、探鉱コースに七割、測量コースに三割の学生が割り振られた。夾皮溝金鉱局の工程師であった笹倉の毎日、午前中が坑内の検査及び実習の指導、午後は主として講義、夜は講義原稿執筆及び金鉱局の会議出席などと、極めて多忙であった。だが、笹倉はこの訓練班の教育には、ありったけの情熱を傾けたとしている(②、三二―三四頁)。訓練班は、元々は初歩の探鉱指導者を育成する予定であったが、実習を多用したその教育は予想以上の成果を上げた、学生の中から二〇名余りを選抜して、瀋陽に送り地質調査の技術員とすることになった(②、五三頁)。同鉱山での笹倉の教育活動は、後に長春の地質調査所副所長の佟城からも高く評価された(『人民服日記』一九一頁)。

以上のように、地質教育は大きな成果を上げ、当時中国で不足していた現場を熟知した中堅技術者の養成に大きく貢献している。このように、日本人留用技術者の貢献を評

価する場合には、工場・鉱山の復興への役割だけではなく、人材育成面からも評価されるべきであろう。

一九四九年一月、瀋陽に東北人民政府工業部が創設され、その下に有色金属管理局が設置された。三月には、笹倉は瀋陽に転勤し、同管理局の計画処鉱務科の工程師に任命された(③、六、七頁)。その後、笹倉は、『人民服日記』で語られているように、東北各地の非鉄金属鉱山の資源探査と開発で活躍し、有色金属管理局総工程師兼専家に任命された。また、反革命鎮圧運動、三反運動などの政治運動も経験した。この後、笹倉は五二年一二月、石咀子鉱山(一九四〇年から三菱鉱業が開発した吉林省内の銅鉱山)の出水事故の責任を問われ、逮捕・投獄され、取り調べを受けた。そして一年九カ月の獄中生活を送り、執行猶予付きの禁固刑となり、五四年九月初めに釈放され、同月二〇日頃に日本に帰国している。なお、この鉱山出水事故について笹倉は、日本では通常、坑道探鉱の際に事前に水文調査は行わず、坑内出水に責任規定はなく、自身には責任はないとしている。出水により死者は出なかったが、坑口まで水没し鉱山側に巨額の損害を与えたために、誰かが責任を取らなければならず、その責任が自分に押し付けられたものと推

測している。⁽⁸⁹⁾

(3) 峠通

本人物について、「中共事情」ではT Tと記載しているが、表2からその氏名は峠通と推定できる。⁽⁹⁰⁾ 峠は、一九五三年当時四五歳であり、測量技術者であった。その学歴、職歴は表2の通りであり、二九年に渡満した後、関東州庁土木課に勤務し、満洲事変後に満鉄地質調査所に移った。四五年五月に第四一四部隊（歩兵）擲弾筒観測手として応召し、牡丹江地区にあつたが、日ソ開戦後部隊は南下し、八月一九日に老爺嶺地区で武装解除を受け捕虜となつた。大連に残した家族が心配であつたため、単独脱出を敢行し、アメーバ赤痢に苦しみながらも同月三日には大連に帰着できた。その後、大連では便利屋（雑役日雇業）として食いつないだが、四六年一〇月、中共軍に留用され山東に向いた。だが、同地では適職がなく、また中共軍の戦況が不利となつたため、留用解除となり、四七年一月末に大連に戻つた。⁽⁹¹⁾ そして、中国経済建設学会の誘いにより、四七年五月に哈爾濱に向いた。留用の条件は、一年ほど北満の復興に協力してくれば確実に日本に遣送し、給与も特

に優遇することであつた。こうして、急いで帰つても米軍占領下の日本での生活も楽ではないと考えて、残留を決めたとされる。ただ後に、これが「巧妙な騙し勧告」であると分かつたとしてゐる。⁽⁹²⁾

峠は、学会による技術者の北満派遣が三次に渡り実施されたとする。第一梯団の派遣が一九四六―四七年始めであり、第二梯団の大連出発が四七年五月二四、二五日、第三梯団が四七年七月頃としてゐる。そして、峠は第二梯団に加わつたとしてゐる。⁽⁹³⁾ この峠の哈爾濱派遣は、一月ほど時期が合わないが、短期派遣ではないことから、前述の第二次北満派遣に参加したものと考えられる。この後、峠は、東北人民政府工磁処鶏西弁事処要員として調査測量業務に従事し、四八年一二月に瀋陽の東北人民政府工業部配属、四九年一月より長春の地質調査所勤務となり、五三年九月上海からの第六次白竜丸により舞鶴に引揚げた。⁽⁹⁴⁾

むすび

大連には多くの日本人技術者が居住していたため、同地では中国共産党及び諸機関による積極的な残留・留用工作がなされた。そして、大連市内の諸工場・研究機関での留

用だけでなく、山東半島や北滿などの共産党支配地区へ送り込まれた技術者も大勢いた。本稿では、新資料「中共事情」を手掛かりとして、それら技術者留用の実態に迫った。まずは、清水本之助の訴えに着目し、清水のおかれた悲惨な処遇を確認した。特に、高齢、病弱な清水を長期間大連で留用し、一九五三年には西安にまで強制的に送致し病状をさらに悪化させたことは、非人道的な行為であった。しかもこうした強制留用という非人道的な行為は、清水一人に対する例外的なものではなく、本稿で明らかにしたように同様な事例が多数存在した。清水は共産党の留用工作を「脅迫・欺瞞・甘言・トリック」等のあらゆる手段を用いた「強制留用」としており、そうした主張も是認できるのである。

また、清水本之助は共産党の留用政策の欺瞞性の最たる事例として、中国経済建設学会の詐欺的行為を厳しく糾弾しており、この訴えを検証すべく本稿では学会の真相にも迫った。そして、学会はこれまで言われているような国民党系あるいは無党無派の組織ではなく、中国共産党系の組織であることがほぼ確定できた。さらには、それが共産党の特務機関・社会部に指揮された偽装組織ではないかとの

仮説も提示した。ともかくも学会は、職と住まいを失った日本人技術者の窮状に取り入り、彼らを困い込み引揚げさせず、多くの人々を北滿にまで送り込んだのである。そして本稿では、北滿に送致された人々がその後遭遇した、病気、病死、処刑、投獄などの悲惨な状況の一端も解明できた。

留用技術者の活動と貢献については、福田熊治郎、笹倉正夫について具体的に検証した。特に、笹倉正夫は夾皮溝鉱山（金山）の復興と開発に重要な役割を果たし、内戦期共産党の財源確保に大きく貢献した。また、東北の内戦終結後、同鉱山において笹倉が実施した地質教育は、当時中国で不足していた現場を熟知した中堅技術者の養成に大きく貢献するものであった。こうした日本人留用技術者による人材育成、技術教育は、彼らの役割と貢献を評価する上でも重要な事項であり、今後の実証研究においても十分留意されるべき問題である。

(1) この後期集団引揚については、大澤武司「日本人引揚と廖承志―廖班の形成・展開とその関与―」（王雪萍編著『戦後日中関係と廖承志―中国の知日派と対日政策

—「慶應義塾大学出版会、二〇一三年」、同「新中国から祖国へ—日本人留用者と日本人戦犯の帰還—」（加藤聖文・田畑光永・松重充浩編『挑戦する満洲研究—地域・民族・時間—』一般社団法人国際善隣協会発行、二〇一五年）がある。また、南誠『中国帰国者をめぐる包摂と排除の歴史社会学』（明石書店、二〇一六年）では、共産党の留用者対策と帰国問題が中国側の資料を用いて考察されている。

- (2) 本資料を紹介したものが、佐藤晋「大陸引揚者と共産圏情報—日米両政府の引揚者尋問調査—」（増田弘編著『大日本帝国の崩壊と引揚・復員』慶應義塾大学出版会、二〇一二年）である。なお、官房調査室の関連機関は、旧軍人で組織された「陸隣会」（あるいは「陸隣会」）であり、調査の本来の目的は軍事的情報や地誌的情報の収集であった。

(3) 中共事情（陸第六三三号）昭和三〇年八月一三日。

(4) 同右稿、一頁。

- (5) 藤田賢二『満洲に築土を築いた人々—上下水道技術者の事績—』（日本水道新聞社、二〇一一年）三九、四〇、二七四頁。しかし、清水の帰国を一九五二年とするのは間違いであり、正しくは五五年である。また、戦前の紳士録によれば、清水は、一八八五年に長野県上水内郡水内村に生まれ、一九一五年京都帝国大学工科大学土木工学科を卒業し、一六年に山林技手に任官して大阪大林区署に勤務、二四年に関東庁技師となり渡満し、二七

年から一年間欧米出張、三七年現在には関東州内務部土木課長の職にあった（『昭和十二年版 満洲紳士録』『日本人物情報大系』一三、皓星社、一九九九年、八九三頁）。

- (6) 中共事情（陸第六三三号）三六頁。なお、引用部分の「世界」に掲載された文章は、「このことを日本の友人は自ら進んでやったのであって、われわれは決して強制はしませんでした。昨年既に多数の日本人を日本に送りかえました。日本に帰った人の数は二万六千人以上ありますから、もしも私の話を信じないなら、その帰国者たちにきいてみて下さい」（『世界』一九五四年一二月号、一〇八、一〇九頁）である。

(7) 中共事情（陸第六三三号）六、七頁。

(8) 同右稿、四七〜四九頁。

- (9) 同右稿、五二〜六一頁。丸沢常哉（元満鉄中央試験所長）は、一九五三年の大連在住日本人の引揚準備とその中止について、次のように回想している。すなわち、大連市政府は同年一月には日本人全ての帰国の方針を示し、大連在住一〇〇〇名の日本人を二組に分け、三月には第一組の出発準備が整い、大連市内の招待所入りをしていった。そして、第一組が大連駅を出発して秦皇島に向かう直前に、突然延期命令が出たのである。その後、大連在住日本人は帰国許可を待ったが、一向に下りず、一月月初めに大連・安東に在住する日本人の帰還中止との中央政府の命令が伝達されたのである、と（丸沢常哉『新中国建設と満鉄中央試験所』二月社、一九七九年、一四二、

一四三頁)。

- (10) 「大連の消息 清水本之助氏の来信」(『大連』第一巻 第一〇号、一九五〇年一月) 五、六頁。
- (11) 中共事情(陸第六三三号) 五二〜六四頁。
- (12) 同右稿、六四、六五頁。
- (13) 第二〇回国会衆議院「海外同胞引揚及び遺家族援護に關する調査特別委員會議録第二号」(昭和二十九年二月六日) 八頁、国会會議録検索システム。
- (14) 中共事情(陸第六三三号) 九五、九六頁。
- (15) 笹倉正夫『人民服日記―ある科学者の証言―』(番町書房、一九七三年) 八頁。
- (16) 石堂清倫『大連の日本人引揚の記録』(青木書店、一九九七年) 一二五頁。また、石堂清倫『わが異端の昭和史』(勁草書房、一九八七年) 三三三頁では、学会に対しては、「ソ連も中国市政府も公認か黙認か自由に行動させている」とされる。
- (17) 前掲『新中国建設と満鉄中央試験所』五五頁。
- (18) 埴谷正雄「元農産課、私と中国」(『満鉄中試会々報』第九号、一九八四年二月) 四三頁、高良寿美子「今井榮量顧問をしのぶ」(『満鉄中試会々報』第三一、二〇〇五年一月) 九頁、前掲『人民服日記』一五四頁。また、『満蒙日本人紳士録 附満蒙銀行会社要覽』(一九二九年、満洲日報社)(竹中憲一編著『人名事典「満洲」に渡った一万人』皓星社、二〇一二年、一七五頁)の記載では、今井は一八八七年長野県上水内郡柳原村に生ま

れ、一九一四年に九州帝大工科大学電気工学科を卒業し、明治専門学校教授となり、一七年に渡満して満鉄に入社し電気作業所に勤務、一九年から二年間欧米に出張、二六年に同所が南満洲電気会社として独立した後、二八年に同社常務取締役に就任して、旅順工科大学講師を兼務したとある。このように、清水と今井は、出身大学は異なっており、清水が今井を同窓といのは間違いであろう。しかし、両者は長野県内の同じ郡の出身者であり、旧知の間柄であったと考えられる。なお、今井が勤務した吉林市の化学工場とは、当時、吉林化工廠と呼ばれた元満洲電気化学工業株式会社の工場であろう。

- (19) 坂本善三郎「中国経済建設学会回顧」(一) (『大陸』第一〇巻第二号、一九五九年二月)、同「中国経済建設学会のこと―回顧録・その二―」(『大陸』第一〇巻第七号、一九五九年七月)。また、雑誌『大陸』の前身誌である『大連』(編集兼発行人・坂本善三郎、大連引揚者連絡事務所発行)には、同学会に關する無署名記事が連載されている。「中国経済建設学会興亡史」(三) (七) (『大連』第一巻第三〜七号、一九五〇年四〜八月)。おそらくこれも坂本善三郎による執筆であろう。なお、(一)、(二)は筆者未見。

- (20) 前掲「中国経済建設学会回顧」(一) 一四〜一六頁。なお、川畑友吉の戦前の経歴は、神戸税関から満洲国経理事務官となり、満洲国商務官弁公処長、大連税関監視部長を経て、天徳信経理に就任とある。日本への引揚

は、四八年夏であった（「川畑友吉氏を憶う」『大陸』第四卷第四号、一九五三年四月、四五頁）。『滿洲紳士録』第三版（一九四〇年）（『日本人物情報大系』一四、皓星社、一九九九年）には、一八九二年に石川県に生まれ、石川県立三中卒、関東庁に勤務し、一九三二年滿洲国に入り、財政部稅務司經理科事務官、奉天稅關稅務科長などを経て、三八年に駐日滿洲国大使館理事官兼經濟部稅務司理事官に就任とある。このように川畑は滿洲国の官吏であり、彼と孫曉勃が旧知の間柄であったということは、事実かも知れない。ただ、孫曉勃の履歴は不明である。

- (21) 前掲「中国經濟建設学会興亡史」(六) 一五頁。
- (22) 前掲「川畑友吉氏を憶う」四五頁。
- (23) 前掲「中国經濟建設学会回顧」(二) 一四頁。
- (24) 前掲「中国經濟建設学会のこと―回顧録・その二―」二一、二二頁。莫德惠（一八八一―一九六八）は、黒龍江省出身、一九四五年以降は東北救済会副会長、東北宣慰使、旧政協委員、国民党東北行營政治委員会委員とある（『東北人物大辞典』第二卷下、二三五三、一三五四頁）。
- (25) 前掲「中国經濟建設学会興亡史」(三) 一二頁。
- (26) 同右稿、二〇、二二頁。大連の日本人引揚げは、一九四六年一〇月二三日にソ連軍当局から日本人労働組合委員長に通知があり、この年一二月より翌年三月末までに、約二〇万人が引揚げた（木村英亮「ソ連軍政下大連の日

本人社会改革と引揚げの記録」（『横浜国立大学人文紀要』第一類 哲学・社会科学』第四二輯、一九九六年一〇月、三四頁）。

- (27) 前掲「新中国建設と滿鉄中央試験所」五五頁。
- (28) 前掲「中国經濟建設学会回顧」(二) 一五、一六頁。
- (29) 前掲「中国經濟建設学会のこと―回顧録・その二―」二〇頁。
- (30) 『旅順の日―旅順工大同窓会五六十周年記念誌―』（旅順工大同窓会、一九七三年）九九、一〇〇頁。その後、安達学長は四七年二月、小倉勉は四八年七月に引揚げている。
- (31) 牧野進「南満工專の終戦物語」（滿鉄会編『滿鉄社員終戦記録』一九九七年、第二版）七一八、七一九頁、前掲「新中国建設と滿鉄中央試験所」五七、五八頁、「喬伝珏」大連民盟ホームページ、<http://www.dlmm.org.cn/rwxzShow.asp?ID=388>、二〇一六年九月二五日、閲覧。
- (32) 前掲「中国經濟建設学会興亡史」(五) 一八頁。
- (33) 中共事情（陸第四八三）「東北地質調査体験記」（仮）、昭和三〇年一月一五日、一頁。なお、本文書には、証言者の氏名の記載はないが、後述のようにその内容から笹倉正夫の証言と判断した。本資料は外務省外交史料館所蔵であり、仮タイトルが手書きで付されている。
- (34) 前掲「中国經濟建設学会興亡史」(七) 一三頁。ただ、一九四六年一二月には山東の共産党軍の要請で、芝罘に

電解工場を建設するためとして瀨川敏彦（元満洲曹達会社新京支社長）が派遣されている（同右稿、一二、一三頁）。

(35) 同右稿、一三頁。この団長は正しくは溝添榮三であろう。その経歴は、一九〇一年鹿兒島市に生まれ、二〇〇年満鉄入社、二五年南満工専卒、牡丹江鉄道建設事務所副所長を経て、四二年一二月に哈爾濱鉄道建設事務所副所長に就任とある（『満洲紳士録』第四版、一九四三年、一二五二頁、『日本人物情報大系』一五、皓星社、一九九年）。

(36) 中共事情（陸第四六六号）「鶏西炭砒」（仮）、昭和三〇年一月八日、一〜八頁。このように当時、大連から北滿への移動はまず北朝鮮の鎮南浦に船で渡り、その後北朝鮮域内を鉄道で北上し北滿に入るというルートが利用されていたのである。また、一行の案内役には東北大学の学生二名が付き、移動途中で次々と同様の技術者群が合流してきたとされる。

(37) 同右稿、八、九頁。鶏西炭砒とは、滴道・城子河・恒山・麻山などの鶏西地区の四炭砒の総称であり、日本支配時代には密山炭田と呼ばれた。一九四七年九月当時は四炭砒すべてが出炭していたとされ、中国共産党にとつて鶴崗炭砒とならぶ重要炭砒であった（前掲『人民服日記』六一、一〇一頁）。

(38) 前掲「鶏西炭砒」（仮）、三、一四、一五頁。
(39) 同右稿、八〜一〇頁。

(40) 前掲『人民服日記』一九、二〇頁。

(41) 前掲「東北地質調査体験記」（仮）一三、一五頁。

(42) 田代幹夫「哈爾濱・吉林留用記」（前掲『満鉄社員終戦記録』）六八三頁。

(43) 前掲『人民服日記』八〜二三頁。なお、大連から鎮南浦への移動は、ソ連の貨物船が使われた。

(44) 福田熊治郎「わが生涯」（『われらの福田老』大和染料社族会、一九七九年）二六頁。

(45) 前掲『人民服日記』一八〜二二頁。

(46) 同右書、二一、二二頁。

(47) 同右書、二二頁。

(48) 同右書、二三頁。

(49) 前掲「東北地質調査体験記」（仮）、一一頁。

(50) 飯塚靖「満鉄中央試験所と満洲化学工業」（岡部牧夫編『南満洲鉄道会社の研究』日本経済評論社、二〇〇八年）二三九、二四〇頁、前掲『新中国建設と満鉄中央試験所』六五頁。

(51) 前掲『新中国建設と満鉄中央試験所』五六頁。丸沢によれば、前述の今井榮量と埴谷正雄の北滿への派遣も廖華による働きかけによるものとしている（同右書、六八頁）。

(52) 住宅調整政策は一九四六年八月より実施された。詳しくは、前掲「ソ連軍政下大連の日本社会改革と引揚の記録」三三頁、参照。

(53) 玖村芳男『長い道』第四卷（東陽書房、一九八八年）

三七九頁。

(54) 「大連便り」(『大連』第二卷第八号、一九五一年八月) 五頁。なお、学会は四七年七月に解散されたとされる(第一次引揚終了後大連で亡くなった人々)『大連』第二卷第七号、一九五一年七月、一八頁)。

(55) 徐友春主編『民国人物大辞典』増訂版上(河北人民出版社、二〇〇七年)一四一八、一九頁、陳曉平「陳孚木・潜伏在汪偽心臓的中共特工」(『南方週末』二〇一五年六月)、<http://www.infzm.com/content/110064>、二〇一六年四月二七日、閲覧。陳孚木(一八九二〜一九五九)は、広東省東莞の人、雲南講武學堂卒、一九二〇年代は汪精衛、廖仲愷などと共に国民党左派として活動し、国民党広東省党部青年部長などを歴任した。三一年の蔣汪合作の際には国民党候補中央執行委員に選出されるが、三三年の福建人民政府樹立に呼応し、その失敗後欧州に逃れた。日中戦争期に陳孚木が汪精衛政権に参加したのは、共産党の情報部門担当者、潘漢年の強い要請によるものであった(前掲「陳孚木・潜伏在汪偽心臓的中共特工」)。

(56) 馮曉蔚「一個与狼共舞一四年蒙冤二〇年的諜海健將袁殊」(『檔案天地』二〇一三年第二期)三四頁。なお、袁殊の経歴と汪精衛政権下での活動については、関智英「袁殊と興亜建国運動―汪精衛政権成立前後の対日和平陣営の動き―」(『東洋学報』第九四卷、二〇一二年六月)が詳しい。馮鉉については、馮順政「引領延安路

一門両部長」人文常州網、<http://www.renwenz.com/a/jcmr/mrms/2012/0409/1155.html>、二〇一六年七月六日、閲覧。

(57) 前掲『新中国建設と満鉄中央試験所』八一〜八五頁。
(58) 阿部良之助「招かれざる国賓」(ダイヤモンド社、一九四九年)二五八、二五九頁、阿部良之助「中共に科学ありや」(ダイヤモンド社、一九五〇年)六九頁。

(59) 森戸陸子「大連」引揚げを見届けた男 高橋庄五郎の日中友好五〇余年(創土社、二〇〇〇年)七四頁。

(60) 百度百科の「肖向前」張為先(URLと閲覧日は省略)、及び張雲「潘漢年伝奇」(上海人民出版社、一九九六年)二七五、二七六頁。

(61) 唐継革「戦闘在敵人心臓里的東北留日青年救亡会」(『長春市委党校学报』一九九九年第二期)。

(62) 前掲「長い道」第四卷、四五〜五一頁。

(63) 「大連残留技術者の動静 アカシヤ委員会の報告」(『大連』第二卷第五号、一九五一年五月)四三頁。

(64) 前掲「新中国建設と満鉄中央試験所」六九、七〇頁。

(65) 福田熊治郎「大陸便り」(『大連』第二卷第六号、一九五一年六月)四頁。本文章は福田が日本の知人に送った手紙の紹介であり、引用部分は編者による説明文である。

(66) 同右稿、四、五頁。

(67) 築瀬成一「寄稿」(前掲「われらの福田老」)一二六、一二七頁。

(68) 前掲「わが生涯」二七頁。

- (69) 貝瀬生「在大連山岡信夫氏の近信」〔大陸〕第四卷第二号、一九五三年二月)七、八頁。
- (70) 『滿鉄鉄道技術研究所史』(滿鉄鉄研会、一九九〇年)一五四、一五五、二〇九、二二〇頁、沢井実「帝国日本の技術者たち」(吉川弘文館、二〇一五年)五六、一六二頁、前掲「在大連山岡信夫氏の近信」八頁。
- (71) 林大輔「大石高行君を偲ぶ」(旅順工大同窓会編『旅順』第九二号、一九八七年一月)一〇〇頁。
- (72) 高田政吉「大陸便り」〔大連〕第二卷第七号、一九五一年七月)四頁。
- (73) 前掲「哈爾賓・吉林留用記」六八二、六八六頁。
- (74) 野中時雄「私の滿鉄での調査の跡」〔兵庫農科大学農業経済〕第三号、一九五八年二月)一二二、一二三頁。
- (75) 中共事情(陸第一二二)「東北における鉍工管理機関、地質調査」(仮)、昭和二十八年二月一日、三三三頁。
- (76) 植谷正雄「残留技術者の悲劇―橋本事件―」〔滿鉄中試会々報〕第一八号、一九九二年二月)七二、七三頁。
- (77) 前掲『人民服日記』五三、五四頁。
- (78) 中共事情(陸第一二〇)「東北における経済建設、建築問題等」(仮)、昭和二十八年一月二八日。
- (79) 同右稿、一、二頁。岡は、満洲国崩壊後、新京から家族の居た大連まで着の身着のままの状態だどり着いたとされる(西澤泰彦『東アジアの日本人建築家―世紀末から日中戦争―』柏書房、二〇一一年、二一六頁)。
- (80) 同右稿、三頁。
- (81) 同右稿、三、四頁。
- (82) 詳しくは、前掲『東アジアの日本人建築家―世紀末から日中戦争―』参照。
- (83) 森井健介「師と友―建築をめぐる人びと―」(鹿島研究所出版会、一九六七年)一九〇頁。
- (84) 岡大路「中共建築事情の概況」(日本建築学会『建築雑誌』第八一〇号、一九五四年五月)。
- (85) 前掲「東北における経済建設、建築問題等」(仮)、三頁。
- (86) 有色金属管理局は、非鉄金属鉍山の経営管理と鉍山調査を行う機関であり、四〇数人の日本人が留用されていたとされる(朱福来「東北非鉄金属管理局の日本人たち」前掲『続新中国に貢献した日本人たち』)。
- (87) 大石高行「私の体験した中国革命ドラマ」〔産業新潮〕第二七卷第一二号、一九七八年一月)一三七、一三八頁。大石は、旅順工大卒業後、満洲炭鉍(株)、北支那開発(株)などを経て、哈爾濱工業大学教授となり、戦後は大連に戻った。後には、有色金属管理局のエンジニアとなり、一九五三年四月に引揚げた。
- (88) 大石高行によれば、同鉍山では金塊が山と積まれて行き、「この金は東北全体の経済の三分の一をまかなったと聞いた」と、している(同右稿、一三九頁)。
- (89) なお、この出水事故を収束させたのも日本人技術者であった。大石高行は、空気ポンプ方式による排水を提案し、それが成功し短期間で操業を回復した(大石高行

「留用技術者への中国の表彰」『産業新潮』第二二卷第八号、一九七三年七月、一七四、一七五頁。

(90) 中共事情(陸第八六)「大連及び山東における留用状況」(仮)、昭和二八年一月二日。

(91) 同右稿、一〇七頁。

(92) 同右稿、二二、二二頁。

(93) 同右稿、二四、二五頁。

(94) 同右稿、二頁。中共事情(陸第二九)、昭和二八年九月一日(桐谷文雄の証言)九頁には、長春の東北科学研究所地質調査所の測量隊長として峠通の名前が確認できさる。

(いいつか やすし・下関市立大学経済学部教授)